F－44 健康管理の重要性と胃がんについての認識

中村学園大家政　山下歌子

目的　成人では健康の衰否はある程度自己診断されるが，疾病によっては自覚症状がないものがある。胃がん初期はその例である。胃がんによる死亡率を減少させるには日常の健康管理のための積極的態度が重要である。本報は健康管理と胃がんに対する認識の実態を調査したものである。

方法　本学学生の父母577名（男302名，女275名）を無作為抽出して調査対象とし，昭和48年5月1日～14日に調査用紙を配布した。回収率は82.6％であった。設問は各項目ごとにχ^2検定し，男女間の有意性を検定した。

結果　積極的に自己の健康保持増進をはかっているものは男41％，女27％であり，男女間に1％水準で有意差があった。男女とも2割程度のものが健康管理をしていなかった。成人病に対する認識度は高く，死亡率の高い順に，脳卒中，悪性腫瘍，心臓疾患と回答した（男女間に有意差なし）。これは厚生省の成人病に関する調査結果と一致している。がんに対する認識度も高く，男女とも90％以上のものが，死亡率が最も高いがん疾病として胃がんをあげた（男女間に有意差なし）。また，現段階で胃がん死からのがれる唯一の方法を胃の切除手術と答えたものが80％以上あった（男女間に有意差なし）。